

おひらのまちの街

荒井敦子



第五回

「まつぼっくり」の夢は、果てしなく

「まつぼっくり」から種が飛び、たくさん松の木が育った。いまは豊かな里山になって、「音楽の森」をつくってくれている。

28歳の時、大和郡山市の小さな部屋に6人の子どもたちが集まった。そこから始まった「まつぼっくり少年少女合唱団」は、今年40周年を迎えた。

〈マリア先生になる！〉

「まつぼっくり」の最初のきっかけは、『サウンド・オブ・ミュージック』。奈良県立郡山高校の1年生、15歳の私は3人の友だちと大阪・梅田に映画を観に行った。薫風香る5月の装いは当時流行のファッション、お気に入りのミニスカートだった。薄暗い館内の中、スクリーンだけはアルプスの大草原が、明るく広がっていた。そこを歌いながら駆け上がってくるマリア先生。その姿が、私の人生の「夢」となった。

センターで太陽の下、一緒に歌った子どもたちが吹き飛ばしてくれた。キャンプカウンスラーとして初めて受けたキャンプには、野迫川村の小学5、6年生。当時の「へき地学習会」に参加していた「やんちゃ」な子どもたちだった。マリア先生とトラップ家の子どもたちのようにすっかり打ち解けると、音楽会の経験がないことも話してくれた。

村の子どもたちに「山の音楽会」を届けたい。でも一人ではできない。音大生に呼びかけると、たちまち20人の仲間が集まってくれた。中高・養護学校の音楽教師、上京して一流のジャズピアニストにと今も音楽の世界で活躍している人たちだ。

〈「山の音楽会」——地域でのコンサート〉

「山の音楽会」は村内を巡る移動コンサートだった。当時、野迫川村の各所には廃校となった小さな校舎が残っていたので、そこを会場に使わせてもらったのだ。私たちも廃校の教室で寝泊まりした。このようなかたちで音楽会が実施できたのは、村の教育委員会が全面的な支援のおかげだが、出演者側である音楽大学にも、強力な支援者がいてくださった。大前哲彦先生である。先生は、とくに社会教育の分野で多くの業績を残されているが、当時はまだ京都大学大学院を卒業したばかりの教育学の若手講師。このときの私たちの活動ぶりは、大学退官の日まで先輩の学生に語っておられたと聞く。その後も、日本音楽療法学会では国家資格化のための大切な活動をして下さっている大前先生は若い頃から今日まで、ずっと私の活動を温かく応援して下さい、大切な恩師である。

大学の4年間は「山の音楽会」と名付けたミニコンサートで明け暮れた感じだが、卒業後の進路は、中学校の音楽教師に

『サウンド・オブ・ミュージック』は、歌の力、家族や祖国への愛、大自然の偉大さ、祈りの尊さ、そして何より平和の大切さを教えてくれた。そのどれもが、私の音楽活動の原点となった。

1か月後、私は声楽の先生に弟子入りしていた。マリア先生を夢見る私は、音楽大学の受験を目指した。放課後は毎日、音楽のレッスンに通わなければならなくなり、吹奏楽部も1年で断念した。当時、私学の強豪校相手に大活躍していた郡山高校野球部の応援で、甲子園で演奏できるのを楽しみしていたのだが。

我慢と努力の甲斐あって、晴れて合格した音楽大学は『サウンド・オブ・ミュージック』の世界にはほど遠く、クラシックばかりの日々だった。その少々の「うんざり」気分は、都祁の県立野外活動

なる決心をしていた。資格を得て教員試験にも受かり、赴任先の学校まで内定していたのだが、なぜか飛び込んだのは「放送の世界」だった。中学校ではマリア先生になれないと、無意識に感じていたのかもしれない。

〈放送の世界——司会と演歌と歌謡曲〉

朝日放送ラジオアシスタントの一般公募には、5000人も応募者がいた。ここから書類審査でこつたのは、わずか1パーセントの50人。その後、5回にわたる厳しいオーディションの結果、なんと奇跡的に合格！

全くおしゃべりの基礎もなく飛び込んできた無鉄砲な新人に、ディレクターさんたちは、一から根気よく（しかし、厳しく）教えて下さった。ピアノの弾き語りコーナーも毎週担当させていただいた。大学でクラシックを勉強してきた私へのリクエストは、歌謡曲や演歌が殆ど。猛練習をして本番をこなす日々の中で、クラシック以外の音楽が身に付くようになっていった。大学卒業後、20代の私は、幅広いジャンルの音楽の勉強に没頭できた。気分は高揚していたが、心身は少々疲れ社会人生活一年目で、なんと10キロほどスリムになった。

その修行のような過酷な日々、心のオアシスとなって下さったのが、桜井一枝さん。今も放送で活躍中だが、ボランティアで滑舌や朗読などおしゃべりの基礎をご指導いただいた。そして何より、人前でトークする「喜び」を教えてくださいました。桜井先生は、今日の「荒井敦子」スタイルの基礎をつくっていただいた大恩人である。

その後6年間、大阪の府立高校の音楽講師と関西二期会で

オペラの研究生、さまざまな音楽関連のボランティアもしながら、放送の仕事が続いた。教えて下さった方々のおかげで私のトークや演奏はリスナーにも好評で、担当コーナーも長く続けさせてもらえたのだが、放送の世界は厳しい。やがて番組の終了が通告された。

〈「コルコタの子どもたち」輝く瞳に魅せられて〉

放送の世界から出た私は、ほどなくインドのカルカッタ空港（現在のコルカタ）に降り立った。それまでの生活をリセットしよう！とインドへの旅に出たのである。ロータリークラブの方々による休眠衣料贈呈と仏跡めぐりの旅にお供したのだ。40年前のインドは、大都市・コルカタでも物乞いの子どもが後を絶たず、空港の中の乗客にまで「わあ〜っ」と群がってくる。親もなく家もなく、満足な衣服も着けず、教育も受けていないかもしれない。外国から来た大人たちが、思わず哀れに思いお金を与えると、子どもたちはまた次の乗客目指して「わあ〜っ」と走り去っていく。私は同情するより先に、その子どもたちの様子に只々圧倒されていた。キラキラした目の輝きに驚き、「生きる力」に感動していたのである。同じ年ごろの日本の子どもたちと比べていたのかもしれない。ピアノのレッスンに通ってきた近所の子どもたちの目と。

日本の恵まれた環境の下、与えられた教育の中でレッスンを受けていた子どもたちとは、明らかに目の輝きが違っていた。折から日本の教育界でも「生きる力」を問う声が高まっていたころだ。インドの子どもたちの逞しい眼差しが、私には1つの「夢」があったことを、思い出させてくれたのである。

それは15歳の頃の「夢」。マリア先生になる「夢」である。

下さい」と望外のお言葉が返ってきた。

さっそく、録音テープを北京に送ると「子どもたちがのびのびと元気に楽しく歌っている姿が目に見えます！是非北京でコンサートをして下さい」。

なんと、生まれたての「まつぼっくり」に、出演のオフアーをいただいたのである。

〈「まつぼっくり」が動き出す〉

「まつぼっくり」への出演依頼に有頂天となったが、渡航費やコンサートの制作費用は、当方の負担。とてもご期待に沿えられそうになかった。悩んでいると、板橋和義さん当時松下住設監査役）が、「この大和郡山の小さな街からシンデレラを出そうじゃないか！皆で協力しよう！」と力強い応援の声を上げてくださった。

板橋さんの大きなご尽力で「まつぼっくりを育てる会」が結成されると、私はそれに押されるように東奔西走、ロータリー・ライオンズ・青年会議所……と多くの団体の皆さんに御浄財のお願いをして回った。「育てる会」発起人のお一人、ル・ベンケイの社長尾川欣司さんからは、町おこしで活躍されている方々をたくさん紹介していただき、その皆さんの応援で「まつぼっくり」が、すくすく育っていった。今も尾川さんは、私の心強い応援団で相談役である。

永六輔さんも「育てる会」の発起人である。大和郡山市青年会議所の講演会で初めて共演させていただいて以来、私たちの小さな会に、何度も何度もご出演くださった。さらに中村八太さん、高石ともやさん、さとう宗幸さん、きたやまおさむさん

私は御所市にあったベトナム難民キャンプで5年間、子どもたちへの音楽ボランティアの活動をしていた。家族から離れ、遠い日本で暮らしながら、それでも子どもたちの目は生き生きしていた。キャンプ通いを続けたのも、その目の輝きが見たかったからかもしれない。

インド・コルコタの子どもたちの目に、御所市・ベトナムの子どもたちの目が重なった。

眩しいほどの目の輝きが、私を駆り立てていた。

〈「まつぼっくり」誕生〉

インドから帰国して半年後の1982年、「まつぼっくり少年少女合唱団」を結成した。

日本の子どもたちが歌で元気になり、子どもたちの歌でみんなが元気になれる合唱団！「まつぼっくり少年少女合唱団」は、当時物質面では恵まれていなかった、インドやベトナムの子どもたちとのふれあいがきっかけとなりつくられたのである。

夢や志は大きかったが、活動の財源は限られていた。収入源はもっぱら放送界で学んだMCのお仕事。コンサートの司会には多少の実績も認められ、小さな舞台ばかりでなく、大きな舞台からもお声がかかるようになっていた。そんな中、大阪シンフォニーホールで「北京放送合唱団」の司会をさせていただいた時、中国でトップの指揮者聶中明先生から「あなたのおしゃべりは（日本語でわかりませんが）、まるで歌っているようですね」と光栄なるお言葉をいただいた。調子に乗って舞台の袖で「実は子どもの合唱団を指導、指揮しています」と、つい口が滑った。すると「では、子どもたちの歌声を送って

……と、第一線でご活躍の方々を次々に紹介していただいた。永さんから、私の小さな活動に光をあててもらい、自信と勇気を頂いた。生涯にわたる私の音楽活動の大切な師匠であり、大恩人である。永六輔さんについては、いつかどこかで、詳しくお話ししたいと願っている。

中国公演壮行コンサートは、松下住設の大講堂を使わせていただいた。大雨の休日にも関わらず、社員の皆さんがボランティアで開催準備をくださった。コンサートには120人も天理高校吹奏楽の部員が出演してくれた。私が部活動のお手伝い（コンサートの司会）をしたお礼だと言って。

登美ヶ丘カトリック教会ではグリーン神父さまがチャリティーコンサート。そして薬師寺では高田好胤管長さまが、お写経道場でのご自分の法話の時間を削って、チャリティーコンサートに充ててくださった。

たくさんの方々からの暖かいご支援のおかげで、まだ固く閉じられていた「まつぼっくり」は開き出したのである。

〈「まつぼっくり」が世界を巡る〉

「まつぼっくり」の初舞台は、奈良県合唱祭。そこで審査員をされていたのが、後に全日本合唱連盟理事長になられた浅井敬壹先生。先生からの高い評価が、私の大きな自信になった。初の海外遠征である中国公演の団長は、迷わず浅井先生にお願いした。

1986年7月。日中平和条約調印から8年後の北京の町には、人民服姿の人が目立っていた。3歳〜18歳の「まつぼっくり」たちは、中国語で自己紹介し、歌も中国語で歌った。

これが評判となり、コンサートは中国全土で放映された。「まつぼっくり」の北京日中友好親善公演は、大成功裏に終わった。

2年後の1988年、グリーン神父さまのお世話で「まつぼっくり」は、オーストラリアへ飛んだ。東大寺の前管長狭川普文さまを団長とする慰霊法要に、子どもたちが歌声を届けたのである。

さらにその2年後の1990年、法徳寺住職の倍巖良明さまを団長に、船に揺られて韓国公演。当時としてはまだ珍しかったホームステイを経験した。子どもたちが舞台で歌う日本の唱歌を、客席の年配の方々は、当時は舞台で日本の歌を歌うことも仲々難しい時代だったが、懐かしそうに声を出して唱和されていた。私は感無量で胸がいっぱいになったことを覚えている。

訪問した慶州の高齢者施設「ナザレ園」では、韓国青年と結婚し、未亡人となり、パスポートもなく、二度と日本の土を踏むことのできない日本人妻のおばあちゃんたちが、涙ぐんで日本の歌を歌われた。そのお姿も、今も脳裏から離れない。

1994年には、2度目のオーストラリアに飛び立った。奈良市とキャンベラ市との姉妹提携式典での大役を仰せつかったのだ。ちょうどその頃から音楽療法の途を模索し始めていた私は、シドニーで関連施設を訪問させていただいた。当時の奈良市長大川靖則さんと同行された市議会議員さんたちも、音楽療法の現場を視察された。

本番のコンサートでは、印象的なハプニングがあった。「まつぼっくり」が歌っていると、客席にいたハンディキャップのある子どもが、大川市長の手を取って舞台上に上がったのだ。式典翌日の地元キャンベラタイムスの第一面には、お手玉を

しながらわらべうたを歌う浴衣姿の「まつぼっくり」の、写真入が大きく紹介されていた。

〈音楽療法とわらべうた〉

まさか奈良市友好団が「歌の力」を目の当たりにしたからではないだろうが、ほどなく奈良市社会福祉協議会に音楽療法推進室が1994年に開設されると、私は室長に抜擢された。奈良市は音楽療法を行政で取り組む日本の先がけとなり、全国的にテレビや新聞のニュースで取り上げられるようになった。

この前年、私自身の人生にも大きな転機が訪れていた。1993年、思ってもみない大きな賞を受賞した。NHK奈良支局長の井橋光三さんの推薦で、「サントリー地域文化賞（個人の部）」を佐治敬三さん御本人からいただいたのである。同じ年に、大和郡山市青年会議所の推薦で、日本青年会議所からTOYP（トイップ）大賞「文部大臣賞」をいただいた。今まで草の根運動的に地道に子どもたちと活動してきたことに、急にスポットが当たった。

翌年、全国初のわらべうたの館「奈良市音声館」がつくられ、私はその館長となってわらべうたの普及をすすめることができるようになった。

もちろん私自身にとって大きな出来事であったが、これは行政が「歌の力」を町づくりに導入した、画期的な出来事であったとも言える。

その起点も「まつぼっくり」だった。奈良市

である。

「まつぼっくり」に入ると、まず私から「入団証」が手渡され、その後子どもには初めての「大役」が待ち受けている。「おやくそく」の読み上げである。これが第1の「話すことの大切さ」を知ってもらう、最初の機会である。

「まつぼっくり」コンサートで歌われる曲は、子どもたち自身が、自分の言葉で紹介する。40秒スピーチで曲に対する自分の思いを、客席で聞いてくれる人に伝える。子どもはその紹介の言葉を、自分で原稿用紙に書き、私にフアクシミリで送ってくる。そこから1対1の電話のやりとりが始まる。私はアドバイスはするけれど、言葉は与えない。何度も何度も書き直して、文章を練り上げていくのは、本人だ。伝えたい言葉を研ぎ澄ましてもらうのだ、自分の力で。

発声練習よりも長い時間をかけて、子どもたちは自分の思いを言葉にする力をも身につけていく。最初は自分の名前も大きな声で言えなかった子どもが、学校で堂々と自分の意見が言えるようになり、みんなのために生徒会活動をし、会長になってリーダーシップを発揮するようになったことも珍しくない。

歌の紹介をする団員を私から指名することはない。自主性を養ってもらったためだが、言い方を変えれば、積極的に手を上げた者だけに与えられる「チャンス」でもあるからだ。

これが第2の「チャンス」の話につながっている。

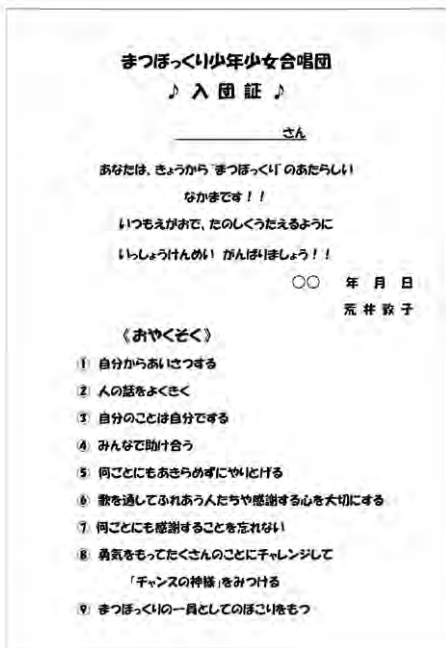
〈チャンスは逃がさない〉

チャンスは逃がさない。この神様はつねに私たちの横を通りすぎてきているが、すれ違った後では前髪はつかめ

音声館の誕生も、子どもたちとの過疎の村々での活動がきっかけであった。また、たぐさんの高齢者施設にも子どもたちと一緒に訪れ、認知機能の低下したお年寄りが、懐かしい唱歌によってふるさとを思い出されるのを目の当たりにしていた。今では、立派に社会貢献してくれている当時の、音声館職員や奈良市音楽療法士たちと共に音楽による町づくりに情熱をいっばい注いでいた私の40代は、私の大きな人生の宝物である。わらべうたも音楽療法も、元を正せば「まつぼっくり」なのである。

〈歌う「話す」話す「歌う」〉

さて、今でもときどき誤解されるが、「まつぼっくり」は歌の教室ではない。私は40年間、3つのことを子どもたちに伝えてきた。1つは「話すことの大切さ」。第2に「チャンスの神様」のこと、そして最後に「日本というふるさと」を愛する気持ち



ない。すれ違う瞬間に、ためらわずしつかりつかむこと。そしてチャンスの神様は、スポットライトの当たる舞台だけではなく、いつも・どこにでもいらっしやる。なにげない日常にも、トイレの掃除をする時だってチャンスの神様はおられる。どんなピンチの時にでも、チャンスの神様はいてくれる。前髪を揺らして、待っていてくれる。そう自分にも言いきかせて、子どもたちと歩んできた。

「ふるさと」を思う

学校では扱いにくい、日本のふるさとへの心も伝えてきた。親を大切に思う心は、おじいちゃん・おばあちゃん、そのまたおじいちゃん・おばあちゃんを大切にすることに結びつく。いまの自分には何億人もの御先祖さまがいて、このあと自分にも何億人もの子孫ができる。自分の命は自分だけのものではないということ。身近な家族への愛が、自分を育ててくれているまじや地域や国、そのすべてを包み込む環境を愛することに繋がっていく。この「生命」への愛が、自分が「生きていくこと」の誇りになり、「生かされていること」への感謝に育っていくと思っている。

音楽の森の神仏への奉納コンサートは、「まつぼっくり」の活動の中で始まった。奈良県内の神社仏閣での私たちの歌の奉納は、子どもたちにその歴史を通した日本の「ふるさと」の心、そして「感謝」の心を伝える素晴らしい宝物である。そして今も大切に続けさせて頂いている、私たちの最も大事な活動になっている。

わらべうたは、まさに音楽の中のお米！

「まつぼっくり」な人たち

「まつぼっくり」を支えていただいた方々は、先に述べた名士を含めて枚挙にいとまがない。でも、「まつぼっくり」の内側にも「恩人」はいる。私たちの活動になくはならない存在となった南かおりさんは、33年前に、事務局のお手伝いをしてくださったからの御縁が続いている大切な私たちの仲間である。「まつぼっくり」は自由に歌う。厳格なコンクールとは縁が無い。だがレパートリーは幅広く、わらべうたからジャズまで：創作ミュージカルなど、私のオリジナル曲も少なくない。この「まつぼっくり」独自の音楽世界を支えてくれているのが、大山りほさんや宮川真由美さんたちによる素晴らしい演奏だ。クラシックからジャズ、邦楽、民族音楽、どの分野でもトップに立つミュージシャンたちは、多様な曲の私が思い描くさまざまなイメージを、見事に再現してくれている、私たちの大切なミュージシャン仲間である。

「わらべうた」という普遍の価値

日本のわらべうたは、世界共通の価値を持っている。あらためてそのことに気づいたのは、新しいミレニウムを目前に控えた2000年。アメリカ演奏旅行の途中、ニューヨーク国連本部のエントランスホールでの公演だった。歌ったのは、すべて大和のわらべうた。縄とび、鞠つき、そしてお手玉をするときに子どもが歌うわらべうた。「まつぼっくり」は、奈良の過疎の村々で、音声館職員と共に採譜したわらべうたを、世界各国の人々に「披露した。その時のさまざまな言語による大歓声と、割れんばかり大きな拍手は、今も私の耳から離れない。

2005年、「まつぼっくり」は日本国際博覧会「愛・地球

日本の食で成長していく子どもたちにとって、わらべうたは離乳食である。日本の伝統音楽にも広がり声明にも繋がり、万葉集にまで広がり日本のふるさとへの心がいっぱい詰まっている。特に、奈良時代の魅力をも、私たちに熱く語り教えて下さったのは今をときめく、日本を代表する万葉学者のお一人、上野誠先生である。奈良で活動しているお陰で御縁を頂いた私たちの大切な師匠である。

「まつぼっくり」の子どもたち

「まつぼっくり」の中で、小学1年から高校3年までの時期を過ごした子どもたちは、やがて単立していく。一人一人が「まつぼっくり」でかけがえのない素晴らしい経験をしてほしい。それが人生で最も多感な時期をお預かりした私の責任だと思っ

音楽の道に進んだ「まつぼっくり」はたくさんいる。例えば、初代リーダーの加護ひかりさん。目下、福岡県宮若市で少年少女合唱団を主宰し、地元のみならず、全国各地に貢献している。今や時の人として地元には注目されている音楽家である。そして、今も私の活動を支えてくれている村尾藍さん。5才の時から音楽の基礎を伝えた「まつぼっくり」。高石ともやさんとのハーモニーで大活躍するプロの歌手である。まもなく二児の母となる。

みんなそれぞれ音楽療法士や看護師、そして保育士や教師として、また会社やお寺といった広範囲の社会で活躍してくれている。そして母として妻として頑張ってくれている。今年、「まつぼっくり」の娘さんが「まつぼっくり」に入団。長年続けてきた私への「ほうび」である。

博「開幕式の舞台上上った。東大寺大仏開眼1250年記念(2002年)で御一緒させて頂いた世界的サクソ奏者渡辺貞夫さんの推薦によるものだった。佐渡裕さんが指揮し、世界のトップ奏者によるオーケストラをバックに、「まつぼっくり」はメッセージング「Share the World」を歌いきった。

生まれたばかりのころ、小さく閉じていた「まつぼっくり」は、いつの間にか世界のナベサダさんと共演するまでに成長し、日本を代表する合唱団として、世界のすみずみまでその種を運ぶようになっていたのだ。いつのまにか、トラップ家の子どもたちはマリア先生よりも大きくなっていった。誇らしい気持ちでいっぱいだった。

同じく2005年、私は11年間にわたる行政のお仕事を卒業させてもらい、奈良市音声館からも、そして音楽療法推進室からも身を引いた。

その大きな理由の1つは、母だった。

「母からのメッセージ」

50歳という年齢も影響していたのだろうか、私は、母一人娘一人の生活を大切にしたいという気持ちを抑えきれなくなった。高齢になった母の介護を、わらべうたよりも音楽療法よりも、何よりも母を優先しようと心に決めたのだ。

そして、退職して7年後、「まつぼっくり」の30周年を目前に控えた2011年7月、いつも陰で支え続けてくれていた、その最愛の母が、突然逝った。

7月23日の地藏盆の日である。生駒の霊山寺さんで「まつぼっくり」たちとの夏合宿していた、その最終日だった。子ども

「まつぼっくり」40年のあゆみ抜粋

- 1989年9月 流井敦子の母に「まつぼっくり合唱団」誕生
- 1994年8月 永大輔氏を招いてのメジロお披露目コンサート
- 1995年1月 永大輔氏と中村八氏を招いてのメジロお披露目コンサート
- 1995年1月 朝日放送「オ初出演(お年玉)ファミリーコンサート(ホテルメッツ大塚) 長谷川きよ子氏を招いてのコンサート(メッツ大塚)
- 11月 高石ともや(ナターシャセブン)と共演(サロココンサート)
- 1986年5月 オーストラリア・モントリオール青少年訪日委員会主催「メジロお披露目コンサート」開催
- 5月 中国公演のためのチャリティコンサート(講師)
- 7月 中国、北京日中友好親善公演
- 8月 全日本少年少女合唱団大会(おおそら賞・受賞(神奈川県立県民ホール))
- 8月 日ノ親善フェスティバル(種原文化会館)
- 9月 ロサンゼルスK.T.E.少年少女合唱団交流演奏会(奈良県立大会)
- 8月 全日本童謡コンクール(関西大会) 全日本童謡コンクール(メッツ大塚) パルホール
- 1988年3月 シルクロード博「マングク」(まゆの夢)(飛井敦子) 作詞作曲(収録NHK奈良放送局)
- 6月 第26回奈良県合唱祭(奈良県文化会館)
- 7月 オーストラリア公演
- 8月 フリッドドレーン・シグムンド・メイバル日本代表でエリツヨリ表彰される
- 1990年7月 韓国公演(釜山・麻州・修徳院)ソウル
- 1990年8月 大和路音楽祭「ホトシヤク」と「シグムンド」奈良シルクロード博(記念国際文化交流財団奈良県新公会堂)
- 1990年10月 第26回奈良県合唱祭(奈良県文化会館)
- 1990年5月 子ノ口ハナカチン(少年少女合唱団コンサート)にゲスト出演(まほろばホール)
- 1992年7月 日加親善音楽交流フェスティバル(カルガリー) 奈良シルクロード博(記念国際文化交流財団奈良県新公会堂)
- 1993年1月 わらべうた初奉納(と手塚(講師)「オーストラリア公演」(キャンパシド))
- 1995年5月 音声館オープン記念(永大輔講演会(音声館))
- 2月 わらべうた奉納(富光寺)
- 3月 春の会館(種原市) 国見苑のお年寄りと交流(御所市)
- 3月 阪神大震災慰問(六甲小学校で慰問コンサート)
- 4月 イタリヤ・アルビロワイヤ(男声合唱団)との交流会に参加
- 7月 ハンガリー・カンスタ(少年少女合唱団)とコンサート(少年少女文化交流センター)
- 8月 テレヒ番組「遠くへ行きたい」収録(大塚)ホト共演(東大寺大仏開眼コンサート)上校時カサスホール)
- 1999年7月 「川の日記」制定記念(大塚ダムと香の川)に出席(少年少女合唱団)少年少女合唱団コンサート(出演(川上村部小学校)
- 7月 ベルギー・カンターレ(少年合唱団)とコンサート(史跡文化センター)
- 12月 「ポルトリリア」来日20周年記念公演にゲスト出演(メッツ大塚)
- 7月 「川の日記」制定記念(国際文化交流センター)とコンサート(少年少女合唱団)とコンサート(少年少女合唱団)とコンサート(少年少女合唱団)
- 8月 9/14放映(大塚)三浦浩氏と共演(朝日女子大)大塚(講師)「第3回中韓日仏教文化交流会(奈良県立大会)」にゲスト出演(奈良県新公会堂)
- 11月 ドイツ・シエラ・シュツリン(少年合唱団)と交流会
- 1999年2月 奈良市制100周年記念式典(奈良市中中央体育館)
- 4月 大塚ダム制定記念コンサート(大塚ダム)
- 11月 東大寺奉納公演(制作(メジロ)カル)
- 2月 二月堂(奈良)村に出演(東大寺大仏殿前)
- 1999年6月 「川の日」制定記念(国際文化交流センター)とコンサート(少年少女合唱団)とコンサート(少年少女合唱団)とコンサート(少年少女合唱団)
- 2000年1月 プラハ国立劇場(オペラ)魔笛に出演(びわこホール)
- 1999年1月 アメリカ演奏旅行(東部メソ州・ニューヨーク国連本部)
- 2000年1月 日本ユネスコ奈良県支部設立記念コンサート(東大寺)
- 8月 文化庁事業としてわらべうた伝承活動(上山村)
- 2月 東京「メジロ」オープン記念式典(皇太子同妃殿下に歌声披露)
- 7月 朝日放送(おはようパーソナリティ道上正三です)に25周年記念放送生出演(メジロ)
- 2002年3月 奈良市中核移行記念式典(なら100年祭)
- 9月 「まつぼっくり」20周年記念コンサート(なら100年祭)
- 10月 東大寺大仏開眼1200年記念慶賀行事(奈良)メジロ(二月堂)
- 10月 長井村(大仏前)特設ステージ
- 10月 東大寺大仏開眼1200年記念慶賀行事(なら100年祭)
- 10月 東大寺大仏開眼1200年記念慶賀行事(なら100年祭)

たちと一緒に、合宿の無事を感謝して、お地藏さんにお祈りを捧げて帰宅すると、母の息はすでになかった。

私がお地藏さんに合掌していたところに絶命したのかもしれない。「お地藏さん」。これが、母が命がけで私に伝えたかったメッセージだと直観した。「子どもを守るお地藏さんのように生きなさい」という声が聴こえてきたような気がした。

私は生涯「まつぼっくり」を守り育てていくことを母に誓った。いつも私を守り育ててくれた母のように。

母のメッセージと信じる「お地藏さん」を、私はミュージカルにし、組曲へと広げた。いま「お地藏さん」は、「音楽の森」で「まつぼっくり」をやさしく包み込んでいる。

〈それからの10年〉

2014年と翌15年、「まつぼっくり」はインドの子どもたちと交流した。私は母が亡くなつてから世界遺産のタージ・マハルの近くにあるアグラのロパ・ムドラ学校へ、足しげく歌の指導に通わせていただいていた。その学校は、壺阪寺の常磐勝範住職がお世話されているアジア・アフリカ国際奉仕財団が運営され、決して裕福とは言えない地域の学校だが、温かい心の通った教育が行われていた。子どもたちは私が訪れるのを心待ちにしてくれていて、授業時間を割いてでも歌を歌いたいと希望する子どもたちのクラスも誕生し、やがて合唱団としての練習も始められた。アグラでよく遊ばれるインドのわらべうたを採譜すると、私が吉野の村で採譜したものと遊びがよく似ているものがあつた。お国柄が偲ばれるそのわらべうたは「まつぼっくり」も大好きなレパートリーとなつた。

など歴史に残る行事に出演させて頂いた。そして国内各地はおるか、中国・オーストラリア・韓国・アメリカ・インドへと、「まつぼっくり」の活動は、国境を越えて広がっていった。

私たちのスローガンは「蟻の眼になれ！鳥の眼になれ！魚の眼になれ！」。蟻の眼がわらべうた、村と町を歌の力で繋いでいく活動だ。鳥の眼はグローバルに世界を見渡す眼、世界各国の人たちとの交流だ。蟻と鳥とで40年、「まつぼっくり」の活動は、市と町と村、国と国、そして子どもから高齢者、ハンディを抱える人々に、音楽の「架け橋」をかけてきた。これはどの時代、どの地域にも普遍的価値があると信じている。

だが、これからの10年、特に必要になるのは、時代の流れを読む眼、魚の眼だろう。目に見えないウイルスの脅威、目を覆いたくなる紛争の悲惨さ。果たして私たちは、音楽の力でこの世の中を癒やすことができるのか。「まつぼっくり」は、こんな苛酷な「時代」だからこそ、音楽の原点であるわらべうたを、音楽の原点の場所である神社仏閣で、高齢者の方々との交流を大切に歌わないといけないと思っっている。

少子化の波は、わが「まつぼっくり」にも押し寄せている。音声館の時代68名にもぼつていた団員は、今は、5名！しかし、弱気になることはない。「まつぼっくり」が音声館から巣立ったところ、高齢者の方々による「大和まほろば合唱団」が結成された。さらに「まつぼっくり」が歌うわらべうたの採譜でお世話になった、室生上笠間には、「むろうコーラス」が誕生した。そして今、シルバー世代の音楽の森の合唱団の皆さんはとも生き生きとされ、高齢者になってやと子育てから開放され、合唱団で正に「自己実現」されているお顔は、眩しいほど美しい。93歳とられた東谷桂子さんが69歳の娘さんと、その

そのようなご縁もあつて2013年、壺阪寺で天竺音楽祭を開催し、「まつぼっくり」がインドのわらべうたを奉納させていただくこと、財団のご厚意で高校生4人が、翌年から2年にわたり、アグラの学校を訪れることになったのだ。「まつぼっくり」たちには生涯忘れられない交流となり、そのうちの1人は、今もなおインド大使館で働く夢を持ち続け努力してくれている。

そして今年。2022年9月1日、「まつぼっくり」は40周年を迎えた。その記念誌は茨城県在住の根本研二さんが、ボランティアで編集してくださつた。長くお蔵入りしている写真のネガや8ミリフィルムまで心血注いで復元され、私にとって想い出のお宝写真満載の記念誌になった。根本さんは永六輔さん高石ともやさんのファンを経て、「まつぼっくり」のファンになって下さつた。根本さんとの連絡役は金澤都代子さんかつての団員のお母さんで、「まつぼっくり」の事務局経験者。以来公私にわたり、私を支えてもらつている。

金澤さんだけではない。「まつぼっくり」の40年は、「まつぼっくり」の保護者の皆さんの献身的なボランティアの40年でもある。

〈これからの10年〉

1982年から2022年。この40年の間に日本は経済超大国に上り詰めたものの、バブルの崩壊で急落し、いまだ停滞状況から抜け出せない。信じられない人災が起こり、恐ろしい自然災害にも見舞われた。一方、奈良では「シルクロード博」や世界文化遺産の登録も相次ぐ中、「まつぼっくり」は、さまざまな神社仏閣での公演や記念すべき平城遷都1300年祭

お孫さん14歳が、そろつて合唱団に入つておられる。過去40年間の歴史になつた、4世代にわたる御家族の合唱団員は、これまでにない新たなわらべうたの可能性を切り開いてくれる。私はそう信じている。

「年々歳々 花相似たり 歳々々々 人同じからずや」
花は年ごとに変わることなく咲くが、人の境遇は年ごとに変化していく。自然が変わらないのに、人の世界ははかなく移りやすい。この唐の詩人劉廷芝の言葉は、特にコロナ禍にあつて身にしてみる。

経済的にも大変な時代を乗り越えようとしている日本、世界中を襲うウイルスや戦争。あともう少し頑張ろう。この困難な時代を超えれば、上り坂を迎える時代がきっと来る。

私も次の50周年を目指して、上昇の波に乗れるように、「まつぼっくり」のいる音楽の森を育てることにいたしますよう。

(以下、次回へ続く)

- 2003年4月 春日大社若邑(出現1000年祭 春祝行事 春日大社本殿前)
- 4月 第5回平城遷都平城宮跡(跡門)
- 7月 第10回シラオリアン(シラオリアン特別委員会なら1000年)
- 12月 第8回春日若宮おん祭(大徳所祭 ならべうた奉納 春日大社大徳所)
- 2005年3月 愛知万博EXPO2005 地球博政府出張イベント(グランドコート 六本木ビル)
- 9月 バル博博覧会(3F 5F 6F 7F)
- 12月 第8回春日若宮おん祭(大徳所祭 ならべうた奉納 春日大社大徳所)
- 2005年3月 博覧会開会式(愛知万博EXPO)
- 4月 「まつぼっくり少年少女合唱団」としてスタート(西大寺)
- 4月 日本ユネスコ協会設立50周年記念行事(子どもの祭典 園芸施設)
- 6月 日本国際博覧会(ジャパンエキスポ2005)「愛知万博EXPO」
- 8月 日本国際博覧会(愛知万博EXPO)
- 10月 サウンズ「愛知万博EXPO」音楽の森(ふれあい館竣工式)
- 2005年5月 室生山上公園「オービング記念式(室生山上公園)
- 2007年7月 第27回男女山コサート(山公園音楽堂)
- 9月 25周年記念コサート(オリジナルミュージカル「森に生かされて」なら1000年)
- 11月 オリジナルミュージカル「森に生かされて」(室生山上公園)
- 2008年9月 ベギー・葉山さんコサート(共演)かむがホール)
- 2009年7月 谷村新司「コソコソ」
- 11月 唐招提寺金堂(平成大徳所跡) 谷村新司さんと共演(唐招提寺)
- 2010年7月 リヨン少年合唱団(シヨントリオン)
- 10月 平城遷都1300年式典(平城宮跡 大徳殿前特設ステージ)
- 11月 平城遷都1300年生徒発表会(ステージ) 秋の愛知ミュージカル「森に生かされて」(コサート)
- 12月 平城遷都1300年記念事業(奈良県文化会館)
- 2011年5月 平城遷都1300年式典(平城宮跡特設ステージ)
- 8月 東アジアサマースクール
- 10月 奈良県立歴史博物館(平城遷都1300年記念) 合唱団「ヤマトコソコソ」
- 12月 奈良マツソン(前日イベント)
- 2012年3月 まつぼっくり少年少女合唱団結成30周年記念コサート(奈良県文化会館)
- 2013年7月 フチク世代から贈る歌のカナシ(もたの「メンセ」やまと郡山城ホール)

- 8月 十津川村に夏合宿(十津川復興支援コサート) 十津川村住民ホール
- 11月 東大寺大仏殿(奉納コサート) 東大寺大仏殿(祈願 東大寺大仏殿)
- 2014年8月 大和郡山市制50周年記念コサート(やまの山) 祈願ホール
- 12月 ロハムドラ小学校と国際交流イベント(アグラ)
- 2015年3月 金峯山寺にて春合宿(蔵王堂初納コサート) (2016年3月も)
- 6月 谷村新司「コソコソ」(ライブ) (コソコソ)
- 6月 学校出演(奈良県文化会館)
- 第100回記念音楽館制作ミュージカル(良弁杉コソコソ)
- 2017年7月 斑鳩町制50周年記念コサート
- 10月 高石ともや氏と共演
- 11月 まつぼっくり35周年ならまつぼっくり(まほろば市民ホール)
- 秋、みつきうし祭り(平城京天平祭)
- 2018年8月 高石ともやコサート(ササシヤニホール)
- 奈良県時空空間絵巻出演
- 2019年12月 創作ミュージカル(川を流れてきたお地藏さん)ならまちセンター
- 2022年10月 奈良県ユネスコ協会設立20周年記念の集い(東大寺 金鐘ホール)



あらい あつこ
奈良県大和郡山市生まれ。声楽家。日本音楽療法学会認定音楽療法士・監事。NPO法人音楽の森理事長。大阪音楽大学声楽科卒業後、放送・教育方面の職歴、難民キャンプや障がい者施設でのボランティア経験を生かし多彩な音楽活動を展開。まつぼっくり少年少女合唱団を結成し世界の都市での公演や合唱指導を通じた国際交流、また県下のわらべ歌採譜に尽力し、町と村の交流に努めている。1993年「サントリー」地域文化賞受賞。共著に『歌の力』(永六輔、荒井敦子著PHP研究所)。その他、創作ミュージカルや校歌等の作詞作曲作品多数。コロナ禍では、「森への贈り物」として寺社への音楽奉納を行い、昨年「ARTS for the future！」事業を採択された。

(題字) 荒井敦子
協力：笹川文林堂 奈良市三条通角振町